慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ミルの社会思想に就て
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.11 (1924. 11) ,p.1564(26)- 1578(40)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241101-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ミルの社會思想に就て

瀧本誠一

ジョン・スチュアート・ミルは勿論社會主義者ではなく、又今日の學界に於て普通に解釋されて居る社會主義の説に左袒する人でもないことは、彼が大著作なる經濟原論第二編第一章以下の二三章、及彼の歿後テーラー孃に依て出版されたる「社會主義」と題する論文集を一讀すれば自ら明白なりと雖も、而かもミルの社會思想が現代の經濟學界に及ぼしたる貢献は實に偉大なるものであつて、彼は或る意味に於て今日のあらゆる社會問題に對し、學界の門戸を開放したる第一人者であつたとも云ひ得らるゝのである。故に余は今此の簡單なる論文に於て彼が當時の嚴正なるオルソドキシーの環境を離れて如何にして此の偉大なる思想を得たるかの研究を試みんとするのである。

自傳に記する所に據ればミルは其の父の親友なるベンタムの倫理立法論(Introduction to the Principles of Morals and legislation)を讀んで大に感服し、之を以て思想界に於ける一新紀元を作りたるものと信じ、信仰、教理及哲學即ち之を總括すれば眞の意味に於ける宗教は是れより成立して將來人間の向上發達は只た之に依つて企圖し得らるゝものと思惟して、其の後專らベンタムの此の學説、即ち功利の説を熱心に鼓吹して、一般に之を普及せしめんことを思立ち、一八二二年に青年篤學の人々と與に功利學會(utilitarian society)なるものを組織し又ウエスミンスター、リヴュウと稱する機關雜誌など發行して、益〻盛に功利説を唱へ、倫理學及政治學の基礎を一切此の説に歸して所謂る哲學的急進主義を極力主張して居つたのである。

然るに其後ミルはオーグスト・コムトと交際し、功利説に對する彼の反對論を聞いて豁然と覺る所ありて俄かに其の態度を變じ、當初熱心に主張して居つたベンタムの所説を訂正して功利説に一種の新らしき説明を下し、ベンタムの所謂る最大幸福の説は聖書路加傳にある基督教の金言である「己が欲する所を隣人に施せ」と云ふことが功利的倫理主義の根本理想であらねばならぬと信ずるに至つたのであるが、此の思想の變化が他の補助的の原因と相須つてミルの經濟學説に著大

の影響を及ぼし、其の大著作なる經濟原論に於てオールッォドックス、エコノミストの文献に思ひも寄らざる人道的の要素を誘入したる所以であつたのであらう。

ミルの原論の題名は Principles of Political Economy with some of their applications to Social Philosophy である、イングラムは此の書名の to の下に Other Branches of の三字を挿入して讀むべしと評して居るが眞に其の通りの意味であつて、而かも此の題名が既に此の原論の特徴を示して居るのであつて、アダム・スミス以來他の諸學者が到底ミルに及ばざりし所以も亦此の一點が證明して居ると云ふことは學者間の通説である。顧ふにスミスの富國論は其の所論の範圍頗ぶる廣汎にして經濟學を專ら時事問題及歴史的の事實に結付けて論述したれば社會哲學としては立派の大著作なるも、内容の事實は既に時代後れに歸するもの鮮なからず、且つ其の成書の體裁甚だ雜駁にして、統一を缺げるが故に稍や非學問的の觀なきにあらず、之に反しリカード一派の學者は斯學を以て主として演繹的の結論に得たる純理の學問となし、所謂るエコノミック、メンを假定して、絶對の論を主張し居るが故に學説としては簡潔明晰にして甚だ徹底し居るも、其の代りには斯學の範圍を狹小に限定し、殆んど現實の社會を度外視したる無味冷淡の學問となしたのである。而してミルは純乎たる經濟學の理論に於てはリカードに與みし、其の實際上の社會觀に於てはスミスを是認し、兩者の岐路に立つて狐疑考量したる結果、此の兩者の説を打つて一丸となし、相共に調和せしめて完全なる經濟學を大成せんと企てたのであつて、原論の副題(Subtitle)は即ち此の抱負を表證して居るのである。

ミルは如上の目的を達せんが爲めに其の原論の重要の部分を二つに分ち、第一篇(Book I)の生産問題は物理的の法則に支配さるゝものであつて、人力では之を奈何ともすべからざるものであると云ひ、社會の進歩に應じ、勿論多少の變化なきにあらざるも、大體は一定不變の物理的法則に據るものなりと斷定し、第二篇(Book II)の分配問題は主として人間の行爲に左右せらるゝものであつて、人情、習慣、歴史、立法等に依り人爲的に變更の出來得るものと認めたのである、即ち約言すれば生産は物理的の自然法に從ひ、分配は社會的の人爲法に從ふものであると信じ、前者は何くの社會何れの時代にも動かざる眞正の經濟法とし、後者は時々處々に依つて變化を免かれざる附屬の經濟法と見做したのである。而して彼が此の區別は決

して成功したるものにあらずして兩者の間に多大の混同を免かれざることは彼が謂はゆる物理的の自然法なるものも、社會の進歩に應じ、多少の變化あることを彼れ自ら明言し居るの事實に徵しても疑を容るゝの餘地ないであらう、加之ならず彼は一般の綜合的社會哲學に屬する倫理學、法理學、經濟學などの法則を論ずるに於ても矢張往々物理學を研究すると同一の方式を採用して社會哲學の眞正の研究方法を執らざりしかば、學問としての經濟學は假定の前提より演繹したる純理の學說でなければならないように誤解したのである、是れがロッシェルをして其の著獨逸經濟學史に於てミルには少しも歷史的の思想はなかつたと批評せしめた所以であらうが、而かもソレでもミルが如上の區別に多大の重きを置きて斯學に温かなる人道的の要素を誘入し、リカードや乃父の冷き學說の範疇を脫して、重要なる社會思想を吹き込みたるは彼が今世紀の新學說に貢獻したる大功績であると云はねばなるまい。

ミルが經濟學に人道的の要素を誘入したるは彼れ自身の明言する所に依れば例のテーラー夫人の賜であるかの如く思はれ、現にシモン・バテンの如きは女性の實驗思想が男性に固有なる絕對思想と混和して、歸納演繹の兩方式を結合して一つの新方式を作るに至れりなどゝ云つて（English thought 342）テーラー夫人の勢力を重大視し、甚だしきは夫人の歿後ミルの思想は忽ち復舊して再び單純なる絕對思想に戻り、遂に「ハミルトンの哲學論」の著作となつて顯はれたりと（同上）批評し居るも、是は少しく過言ではあるまいかと思はる、ミルの自傳の記事はテーラー夫人を極力稱揚せんとするの餘り自ら謙讓して學界に於ける自分の功績の大部分を彼女に歸したまでの事であつて、實際ミルが云へる如く「人間社會の實際に學理の應用を爲さしめたる總ての點に付きては余は却つて彼女の弟子であつた」と（Autobiography 247）明言しあるが如きを其の言葉通りに信用して彼が經濟學に宏博なる社會學的の成分を注入したるは全くテーラー夫人の力であると思つたならばソレは誤解の甚だしきものであらう、挨拶の言、禮讓の言、感激の言、愛慕の言等は如何なる人格者の口よりするも大に割引して聞くの必要あることは何人も疑はざる所ならずや。

余の知る所ではミルは天性甚だ同情に富める熱血男子であつたから、其の頭腦

の明晰なると、其の父の敎育の嚴正なるとに依つて、學問上の理知に長け居たるに拘はらず、平素頗ぶる人情に厚く、事物に感じ易き人であつたことは疑ひなき事實なるが如し、自傳の記事に據れば彼は或る時マーモンテルの備忘錄を讀み、其の父が死したる時の狀況及家族の不幸を記しある一節に至り愀然と涙を流して感泣し（自傳一四一頁）爾後人生最大の幸福は人間の內部の改良を圖るにあつて存することを自覺し、進んで先づ自己の感情の向上を計るの必要を認め、彼が從來旣に嗜みつゝあつた音樂に對して一層の興味を感じ、又大に詩歌の好みを增加すると同時に彼が父より敎へ込まれたる理窟一點張りの無味冷淡なる功利主義の思想を改めたる由なるも（ブライスの Political Economy in England 934）その實必ずしもそうでなかつたことは其の後ミルが公にしたる原論を始め其の他の著作の明證する所なれども、兎に角如上の事實に徵してもミルが一般人間社會に對し、深き同情を有し、彼が晩年の著作功利論（utilitalianism）に於て最大幸福の意義を一層明確に說明するに當り、其の幸福の標準たる快樂は唯た分量のみの問題にあらずして、性質の高下如何をも考量せざる可らざることを主張したる根本思想即ち他愛主義は彼が先天的の性質に淵源すること多大なりと云ふも恐らくは過言にあらざるべしと思はる。故に是等の事を綜合して之を觀察すればミルの經濟學說上にテーラー夫人の勢力は全然少しも及んで居らないとは斷言すること能はざるも、ミル自身が云ふが如く原論の重要部分即ちミルのミルたる特色を發揮したる人道的の要素及社會的の廣大なる思想を經濟學に誘入したる點が夫人の啓發に因ると云ふの說は余の斷じて取らざる所である。現に此の事は彼が壯年の大著作なる論理學に於て旣に品性學（Ethology）の創設を企てたる一事を以てしても明白であるのみならず、原論の序文に於て其の著作の目的を發表したる文中アダム・スミスの富國論を大に稱揚し、彼が特色は學說を實際と結付けたる點にありと云つて、此の點に非常の重きを置き、又經濟學は事實上社會哲學の他の學科と分離することの出來ない關係あることを述べて自分の原論は初めよりスミスの富國論を標準としたる事を述べて居ることに想到すれば彼が原論の重要部分が此の點に存することは一般學者の認むる所なるのみならず、著者自らも斯く信じて居つたことは疑いないであらう、然らば此の重要部分の學說がテーラー夫人の敎になりたるもの

なりとは如何にしても受け取れ難いのである。ミルは其の論集（Dissertations and Discussions）の第二卷に載せてある「婦人の解放」と題する一文を特にテーラー夫人の自作として吹聽して居るが今其の文を讀んで見れば、成程此の一文は確かに婦人の執筆と見へ、ミルが頻りと之を稱賛し居るに拘はらず、洵に平々凡々たる意見であつて原論の重要部分を占むる堂々たる學說を唱ふるが如き大識見家の手に成れるものとは決して思はれないのである。故に余は是等の事實に徵してもミルの自傳は少なくともテーラー夫人に關する事だけは大に事實を割引して讀むべきものであると信ずるのである。

然らばミルが其の經濟學說に人道的の要素を誘入したるは全く彼が天性のみに出でたるかと云ふにソレは必ずしもソウでなくして前にも述べたる如くコムトの實證哲學が大に與かつて力ありしことは明かである。ミルは平生胸襟を開いて他人の說を容るゝる美德を有し、同輩の親友は勿論自分よりヅッと後進なる弟子位の人々に對しても其の說の取るべきものは極めて自由に之を採用することを憚からなかつたのである、故に獨りコムトのみならず當時交遊しつゝあつた諸學者の所長を採て悉く自家藥籠中の物となしたことは是れ又疑ひないのであるが、就中コムトの勢力を受けたること多大なりしは其の著論理學、オーグスト・コムトと實證哲學及功利論等を一讀すれば明瞭である、余は左に其の一例を示さん。

ミルは其の自傳に於て「論理學」はテーラー夫人の力を藉りたること少なかりしことを述べ、其の下註に附記して「余がコムトに負ふ所のものは其の「實證哲學」として公にせられたる著作に據るものなり」と前提し、又尙進んで「其の所謂るコムトに負ふ所のものも世人が認るが如く多大ならざりし事は余が本書の記事で明であらうと斷りつゝ斷言して曰く本書（論理學）の根本的學說を包含する第一卷は余がコムトの著作を閱讀する前既に全く脫稿せるものなり、余は假定（Hypotheses）の一章及代數の論理（Logic of Algebra）に關する意見に付きて彼より多くの重要なる思想を得たることを明言するに憚からず、然れども余が論理的方式の適用に關し最も切要なる改良を加ふるに當り彼が意見を採用したるは倫理學の論理（Logic of the Moral Sciences）に關する最終の一篇なり」と（自傳二四五頁の下註）即ち茲にミルが所謂る最終の一篇なるものは第六篇にして彼が「論理學」の中殊に出色の部分とし

て著明なるものである。現に彼が經濟原論に於て生産の法則と分配の法則と分別して後者に人道的の要素を誘入したる根本思想は彼が最初構成せんと企てたる品性學に淵源するのであつて、此の品性學が不成功に終りしが故に原論を二つに分けて分配の法則に多大の重きを置きて「論理學」の第六篇に論じたる主要の點を更らに敷衍擴充して原論の第二篇を作成したのである。而して今ミルの自白の如く「論理學」の此の第六篇が果してコムトの實證哲學に負ふ所少なからずとすれば彼が品性學の思想即ち後日原論に現はれたる分配の法則は結局コムトの思想に基きたるものなることはミルが自ら認むる所なりと云はねばなるまい。但ミルが人間の品性を形成する法則を發見するには唯た一つの演繹論法を用ふるより外に方法なしと斷定したことは根本的にコムトの實證哲學の論法に反するものなれども、兎に角彼が經濟學上廣き社會的の觀察を下して、其の改良發達上人間の品性如何を重大視することを知覺したるはコムトの賜なること蔽ふ可らざる事實であらう。

ミルは其の「論理學」の第六篇に於て屢々コムトに對する稱賛の言を發し、例へば「新らしき歴史學派の中に於ても我々が歴史上に得たる總ての概念を人間の性質に關する法則と結付けるの必要を認めたるものは唯たコムト一人である」と云ひ、又「歴史的研究法を秩序的に行はんと企てたるものは從來獨りコムトのみである、彼が著作は歴史的方式の考に從つて社會現象の研究を行へる唯一の例である」と云ふが如き語調に依つてコムトに對する尊敬を表するのみならず、事實彼が社會學に關する觀察法を二つに分ち、一を靜態社會學とし、他の一を動態社會學となし、二者各〻異りたる法則、即ち前者は對立の法、後者は承繼の法に依つて支配さるゝものなることを論じたるが如き重要の意見は皆コムトに淵源するものである。

「然るにミルは終生リカード式の舊思想を全然脱却することを能はざりしが故にコムトの歴史的方式を充分に適用することを知らず、彼が原論の第四篇に於て動態經濟學の研究を試みたるも遂に其の目的を達することが出來なかつたのは遺憾の極みである。

右に述べたる所に依ればミルの社會的思想の根本はコムトの說に基くこと多大なるべきは明瞭であらう、然れども勿論主としてコムト一人の說に歸因するも

のとは認むべからず、彼れ自ら云へる如くサン・シモン若くはシスモンジ等の意見を藉りたる點も少なからざるは勿論否認すべからざる事實である。現にミルが社會主義に類する意見を主張し(一)賃銀制度を解除して之に代はるに生産者の共同組合制を以てせんとを希望し(二)地税の重加に依つて地代の自然增得を公收せんことを欲し(三)遺産相續權に制限を加へて富の不平均を減少せんことを主張したるが如きは(Gide and Rist:-History of Econonic doctrine 369 參考)大體右兩人等の思想に基きたるものであつて、其の事はミルの「社會主義」と題する論集を見れば歴々として體跡が現はれて居るようである、兎に角彼の社會思想の多くは確かに佛國の學説に淵源することは余の言を待たずして明かである。

然れども今又一歩を進めて廣く之を達觀すればミルの社會思想は何くの國、何れの人の説に基くと云はんよりは、寧ろ其の時の時代思想に感化されたる影響であると認めた方が至當であると云はねばなるまい、而して此の點に付きては常に穩健の學説を以て有名なるマーシャルの批評が甚だ適切であると信ずるが故に此に其の一節を抄譯すること左の如し

十九世紀の始に於ては理化學的の科學が盛に流行したのであるが此等の科學は皆各々異なりたる學問なるも、其の主題が總ての邦國總ての時代に於て少しの變化もなく、全然一定して居ると云ふことは總て共通であつたのである。然るに時代の經過に隨ひ生物學的の科學が次第々々に其の萠芽を發し、隨て世人は漸く有機組織の發達に關する法則を研究することゝなり、之に付て多少明白なる思想を有するに至つたのである、即ち彼等(一般世人)は學問の主題其のものが夫れ夫れ其の發達の段階を經由するものなれば此の段階の或る期間に適用せらるゝ法則は若干の變化なくしては他の期間に當てはまるものにあらずと云ふことを覺るようになつて來て、而かも此の新らしき觀念に基きたる勢力が人間に關するアラユル學科に影響して遂にゲーテ、ヘーゲル、コムト等の作物となつて現はれたるものである。

是れより生物學の研究は俄然として長足の進歩をなし、宛も曩きに理化學上の發明が盛んなりし如く生物學上の發明が續々と行はれ、遂に之が爲めに倫理學及び歴史學などの上にも著るしき變調を來したのであるが、我が經濟學も亦

此の一般の風潮に促かされ、斯學を研究するものは年々進んで人間の性質が境遇に因つて變化するものなる事、隨て其の人間の品性が財の生産、分配及消費に對して相互の關係を有するものなる事に多大の注意を拂ふに至つたのである、乃ち此の新傾向の最も重要なる表彰としてジョン・スチュアート・ミルの大著作なる經濟原論が現はれたのである云々。（マーシャル原論第二版六三―四頁）

ミルの原論の來歴は大要斯くの如きものであつて其の書の前半（生産論の部分）は十九世紀前半までの舊學說を代表し、其の後半（分配論の部分）は十九世紀の後半に於ける新思潮を代表したものである、マーシャルの見る所はミル自身の云ふ所よりは却つて其の當を得たるものであらう。

雜　錄

社會と自然との平衡關係と「生産力」

伊藤秀一

一

Karl Marx が其の唯物史觀の公式に於て說く所に遵へば、法制上及び政治上の上層建築が據つて以て立つ所の、又一定の社會的意識形態が之に適應する所の眞實の基礎は、社會の經濟的構造、換言せば人間が彼等の生活の社會的生産に於て入り込む所の一定の必然的の彼等の意志から獨立したる關係、即彼等の物質的生産力の一定の發展階段に適應する所の生産關係の總和である。物質的生活の生産方法は一般に社會的政治的精神的の生活過程を條件づけるものである。（Marx: Zur Kritik der Politischer Oekonomie. Vorwort. LV）斯くて Marx に依れば人間は新なる生産力を獲得すると共に其の生産方法を變化し、又生産方法を變化すると共に總て彼等の社會的關係を變化するが故に、畢竟社會の生産力の變動は社會一切の變化の根本的原動力であると言ふ事が出來るのである。從つて先づ此場合の生産力とは如何なるものを意味して居るのである乎又如何なる關係に於て生産力の變化が生産方法を變化し從つて一切の社會的關係を變化すと言ひ得られる乎が問題とならなければならないのは當然である。然るに Marx の唯物史觀に對する幾多の批判的文獻は此等の諸點に關する解釋に於て甚だ區々であつて、此の事情をかの Tugan-Baranowsky の如きは敢て次の如く斷言して居る。「殆ど總ての批評家又は註釋家